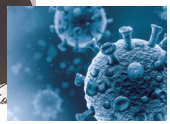
北里柴三郎初代医学部長



新型コロナウイルス（イメージ図）

FRONTIER
教育・研究の最前線

基礎・臨床一家族のごとく　慶應ドンネルプロジェクト

医学部長　天谷雅行（あまがいまさゆき）

慶應義塾大学病院において、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による院内感染、初期臨床研修医の集団感染が２０２０年３月末に発生し、信濃町キャンパスに激震が走った。医療スタッフはリスクの高い状況下で、黙々と患者さんの治療を続けていた。毎日のように他の国々で医療崩壊が報じられ、わが国にもその危機が迫る中で、「COVID-19を克服するために、自分たちにできることはないか」その熱い気持ちが、キャンパス内に充満するのに時間はかからなかった。

１８９４年、ペストがアジアで大流行をしていた。当時、ペストは、原因菌も治療法も確立しておらず、致死率９割を超えていた。流行地香港で、調査隊の北里柴三郎一行は、窓も閉めた８畳ほどの部屋で、５人以上で死体を解剖し、菌の同定を試みていた。調査隊から複数名の感染者が発生し、死亡者も出現した。しかし、北里は、３密条件がすべて揃っている悪環境の中で、ペスト菌を世界に先駆けて発見する。

１３０年近くたった２０２０年、我々はCOVID-19に対峙し、同じような戦いをしている。「基礎・臨床一家族のごとく」と唱えた初代医学部長北里柴三郎の遺伝子は、脈々と受け継がれていた。COVID-19感染拡大に対して、感染・免疫・炎症に関する研究を加速し、人材を育成することを目的として、北里の愛称「ドンネル（雷）先生」を冠した慶應ドンネルプロジェクトが立ち上げられた。感染者から分離されたウイルスの全遺伝子配列を解析するゲノム解析、大学病院内での感染経路を解明する疫学解析、快復患者より感染を中和する抗体を単離する治療法開発等、数多くのプロジェクトが信濃町キャンパスで展開されている。

前代未聞の困難に陥り、到底無理だろうと思われる課題に対しても、若手の教員、職員が「わかりました。やりましょう」と一寸の迷いもなく答える姿をみて、人間の強さを感じた。私たちは決して一人ではない。襷（たすき）をつなぐ次世代がいる。この長い試練の先には、違った太陽の光のもと、明るい未来があることを確信している。